
円山応挙筆「波上白骨坐禅図」に関する考察

山田麻里亜(早稲田大学)

兵庫県香住の大乗寺は、円山応挙(1733-1795)とその一門の障壁画を多数所蔵することから、「応挙寺」の名で知られている。室町時代から桃山時代にかけて酷く荒廃していたが、江戸時代になって当時の住職・密蔵(1716~1786)が再建を計画、密蔵亡き後は弟子の密英(1753~1802)がその遺志を引き継ぎ、再建を果たしたという。大乗寺と応挙の関わりについては、密蔵または密英が若き日の応挙を支援したことに始まると伝えられている。

大乗寺が所蔵する円山応挙筆「波上白骨坐禅図」は、写実的で平明な画風で知られる応挙の作品において特異な存在として広く知られてきたが、その画題の意味については何らかの仏教的な意味が込められていると考えられてはきたものの、詳細な検討を加えられなかった。

また本作品については、その制作背景に当時隆盛していた解剖学との関連が指摘されてきたが、発表者が現代の解剖学書をもとに検証を行ったところ、本作品には解剖学的に多くの誤りがあることが判明した。これは当時刊行されていた解剖学書と比較しても不備が多く、そこには解剖学的な写実性の追求とは異なる制作意図があったものと想定される。

「波上白骨坐禅図」の図像については、すでに深山孝彰氏が、江戸時代に刊行された版本『九想詩諺解』(元禄7年・1694)と『九想詩絵抄』(文化7年・1810)に所収の野原で坐禅する骸骨の図に典拠があると指摘されている。そこから発展して、本発表では「波上白骨坐禅図」が肉体への執着を絶つために人体が腐敗していく様や白骨を観想する、不浄観想図として描かれた可能性を提示する。また本作品において今まで解明されることのなかった波と坐禅する骸骨の組み合わせについて、この典拠が「禅観経典」と呼ばれる一連の文献類の内、『五門禅経要用法』に見出されることを指摘する。

さらに本作品の裏面に貼られた題箋墨書「白骨 源應舉寫意 但洲大乗寺住心城我」に注目する。実は「心城」は密英の字である。本発表ではこの裏書が密英自筆であることを、他の筆跡との比較によって立証する。そして裏書の末尾に「我」と記されていることを考えれば、本作品は密英自身の姿を描いた作品と解釈することができる。

また「波上白骨坐禅図」の骸骨が向かって左斜めに体を向け、坐禅する姿をとっていることは、僧侶の肖像画を想起させる。賛を書くために残された画面上方の余白の存在や、落款を記さず印章のみを捺す点など、本作品は骸骨を描いていながら肖像画の形式を示していると言える。すなわち「波上白骨坐禅図」は、密英が『五門禅経要用法』に説かれる修行を行う己自身の姿を応挙に描かせた作品であると考えられる。本作品を考察することによって、応挙と大乗寺の知られざる一面を明らかにしたい。